

デカルトにおける「内的感覚」と「情念」について  
——『哲学原理』から『情念論』へ——

三上 航志（京都大学）

デカルトは自身の最後の著作である『情念論』（1649）を出版する以前に、情念（*passion, affectus*）に関して多くのことを語ってこなかった。周知のとおり、彼は王妃エリザベトとの対話に促され、「以前には決して語ってこなかった」（AT. IV. 407.）と彼自身みとめる主題である情念について探究を深め、これが『情念論』の成立の契機となった。しかし、これ以前にも、『人間論』（1632-1633）や『哲学原理』（1644 /1647）第4部190項において、情念について若干の記述が残されている。ここで注目すべきは、「情念」の本性的定義について、変化がみられるという点である。つまり、『人間論』や『哲学原理』においては、情念は、「内的感覚（*sensus internus / sentiment intérieur*）」の一つとして、飢えや渇きの感覚といった「自然的衝動（*appetitus naturalis*）」と等しい地位が与えられているもの（AT. XI. 163-168. / AT. VII. 316-318.）、『情念論』においては、この地位は撤廃され、情念は、神経に依存する三種類の知覚の中の「魂自身に関係づけられる」知覚として規定され直されているのだ（第22項—25項 AT. XI. 345-348.）。さらに、ジルソンが指摘するように、内的感覚とは、スコラにおいては、共通感覚、想像力、評定力、記憶力といった一連の能力を意味する概念であり、決して情念を意味する用語ではなかったという事実を考慮に入れるならば、この定義の変遷はより重要性を増すことになるだろう（É. Gilson, *Index Scolastico-Cartésien*, Vrin, 1960. n° 410.）。本発表では、情念の本性をめぐるデカルト的定義の変遷は、その思考の発展のどのような側面によって支えられているのかという問いに焦点を合わせ、彼が最晩年において直面せざるを得なかった情念という現象の複雑さについて明らかにしたい。